

飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和2年10月25日現在

今月の重点活動

■スマート農業 ラジコン式草刈機の実演会を開催

10月15日、飛騨市宮川町のナチュラルみやがわでラジコン式草刈機の実演会が開催された。実演会は中山間地域等直接支払制度の協定を締結している集落の農業者を対象に開催され、関係者を含め30名程が参加した。

当日はラジコン式草刈機2機種が紹介され、実際に水田畦畔の法面で草刈り作業が行われた。参加した農業者は、畦畔から離れた安定した場所から機体を操作でき、安全で快適に素早く草刈作業ができるラジコン式草刈機に羨望の目を向けていた。

農業普及課では、スマート農業加速化実証プロジェクトやスマート農業機械・機器貸出事業を活用し、各市村の実演会開催を支援しており、すでに高山市では6月26日、白川村では9月19日に開催されている。今後はアシストスーツの実演会開催を支援し、スマート農業の普及に向けた活動を継続していく。



【畦畔法面での実演】

多様な担い手づくり

■担い手 飛騨高山高校と連携して「飛騨の農業を語る会」開催

飛騨地域の農業発展のために、飛騨高山高校と農林事務所との連携を密にすることで担い手育成や農業振興に繋げることを目的として毎年開催している「飛騨の農業を語る会」が9月30日に開催され、飛騨高山高校と飛騨農林事務所の職員43名が出席した。

当日は、教育現場や普及現場におけるスマート農業の取り組みについて情報提供し、その後、4分科会に分かれて意見交換を行った。同会場でアシストスーツや空調服の紹介及び試着をし、高山市内のほうれんそうハウスに設置している自動遮光システムや環境測定機器の実証ほ場を視察した。

農業普及課では今後も、担い手育成や確保、飛騨地域の農業振興に向けて飛騨高山高校との連携を強化していく。



【アシストスーツを試着】

■女性農業経営アドバイザー 飛騨ブロック視察研修会を開催

10月13日に、女性農業経営アドバイザー飛騨ブロックの視察研修会が開催された。新型コロナウイルス対策として、今年度の視察先は飛騨地域内とし、ドラゴンフルーツを生産している「(有)FRUSIC」、すっぽん・チョウザメを養殖している「(株)焼岳すっぽん」、水稻生産法人の和仁農園が経営するカフェ「和仁の蔵」を視察した。

いずれの視察先も地域の特色を活かした生産・経営をしていることが伺え、会員の今後の経営への一助となる研修会となった。

農業普及課では、視察先の提案、日程調整等を行った。今後も女性農業経営アドバイザー会員の資質向上に向けて活動を支援する。



【FRUSICを視察】

■新規就農 飛騨市で初となるハウス建て協力活動「結（ゆい）」を実施

飛騨地域トマト研修所では、現在2組3名の研修生が来年度の就農に向けてハウス建ての準備を行っている。

10月21日、飛騨市神岡町で来年4月から就農予定の夫婦を対象に「結」を行った。「結」とは、新規就農者に対し、生産部会の農業者や関係機関職員がハウス建てを支援する活動であり、高山市では「結」によるハウス建てが定着しているが、飛騨市では過去に例がなく、関係機関から働きかけて今回初めて実現した。

当日は、関係機関のほかトマト研修所の卒業生と高原蔬菜出荷組合員合わせて15名が参加し、パイプハウスのアーチなどを運んだ。研修生のは場準備等の段取りも良く、2時間程度で作業が完了した。

今後は飛騨市古川町で就農予定の研修生について同様に「結」によるハウス建てを行う予定であり、農業普及課では結の実施に向けて関係機関と調整を行っていく。



【飛騨市初となる結】

■夏秋トマト 若手農業者の研修会（灰色かび病対策について）

10月7日に、農業経営課の革新支援専門員を講師に迎え、高山南地域の生産者ほ場で若手農業者を中心とした灰色かび病対策研修会を開催した。

研修ほ場を提供した生産者は、昨年度、秋期の灰色かび病による減収に悩まされたことから、今年度は使用資材及び回数工夫して防除を実施しており、その防除履歴を全員で確認して意見を交わした。革新支援専門員からは灰色かび病に効果的な防除方法が説明され、防除履歴から、継続すべき点、改善すべき点について指導が行われた。

また、農業普及課からは、樹勢を落とさずに栽培する方法として、土壌溶液、葉中の硝酸イオン濃度を目安にした栽培管理について、今年度の調査データをもとに説明した。

今後も生産者のニーズに応じた研修会を開催し、生産者ごとの減収要因の解消・収量性への影響軽減に向けて支援を行う。



【防除履歴を確認する生産者】

■新規就農 飛騨市の定年帰農者・新規就農者の営農状況を確認

飛騨市では、10月20日に中高年帰農者支援事業補助金（市単）の給付対象者3経営体と、農業次世代人材投資事業の給付対象者10経営体に対して関係機関とともに営農状況の確認を行った。

中高年帰農者との面談では、水稻の他にもなす、アスパラガス、とうもろこし等多品目の野菜を生産しており、意欲的に農業に取り組んでいることが伺えた。

新規就農者とは、ほ場にて面談を行い、今年の結果と今後の課題について状況確認を行った。昨年よりも単収が低下した就農者もいたが、今年の努力が実り単収を伸ばした就農者も多くいた。

農業普及課では、今後も関係機関と連携し、就農者ごとの課題を明確化しながら、定年帰農者・新規就農者の経営安定に向けて支援を行う。



【面談で今年の成果と課題を説明する新規就農者】

■ 6次産業化・農福連携 **第1回若者農業塾**

10月9日、高山市のひだホテルプラザにて農業出荷団体THATが第1回若者農業塾を開催し、関係者を含め約20名が参加した。

当日は、(一社)日本食農連携機構理事中部支部長である株式会社恵那川上屋代表取締役の鎌田真悟氏による講演会が行われ、参加者は熱心に聞き、食農連携に興味を示していた。

農業出荷団体THATは飛騨地域の若手農家9名の団体で、各自で栽培したトマトやパプリカ等を共同で出荷している。今年度よりトマトの箱折りと箱詰めを福祉事業所へ委託しており、農福連携の取組みも始めたところである。

農業普及課では、引き続き若手農業者の活動支援及び、6次産業化、農福連携への取組み支援を行っていく。



【第1回若者農業塾】

■ 普及手法研修 **農業改良普及指導員OBによるOJT研修**

9月下旬より、新採及び新任1、2年目の若手普及職員に対し、普及業務経験者OBによるOJT研修を行っている。

研修では、巡回に同行してもらい生産者とのコミュニケーションの取り方やほ場並びに各作物の生育ステージに合わせた栽培技術、病虫害診断等の普及手法を学んでいる。普段の巡回では見逃している視点やほ場での病虫害診断の手法を学ぶことができ、とても良い機会となっている。

今後は、各種研修会での資料作成のポイントや話術等を研修予定である。近年普及指導員が減少し、先輩普及指導員から学ぶ機会が減っている中で、普及職員OBから普及手法を学び、身に付け、1日でも早く生産者に頼られ、産地になくてはならない普及指導員を目指していきたい。



【OB職員から学ぶ】

売れるブランドづくり

■ 白川村 **米食味コンクール出品支援**

白川村は地元産米の独自ブランド化に取り組んでおり、その一環として10月29日に米食味コンクールでの入賞を目指している。今年で6回目を迎え、研究会からは24点の出品が予定されており、白川村美味しい米づくり研究会が生産した米を出品に向けて調整した。

調製作業は白川村役場の担当者とともに10月7日、16日、19日の3日間にわたって行い、脱穀・粃摺り・選別を実施した。また、さらなる食味向上につなげるべく、水分含量や千粒重などの調査も併せて実施した。

農業普及課は今後も研究会や白川村と連携し、白川郷産米の食味コンクールでの入賞と、ブランド確立のための取組みを支援していく。



【1点ずつ丁寧に調整】

■夏秋トマト **GAPに取り組む生産者組織で自主検査の実施**

丹生川蔬菜出荷組合トマト部会「天空のめぐみ班」は、地域に先立ってGAPに取り組んでおり、大手量販店のプライベートブランドを販路に持つなど、付加価値の高いトマト生産を実践している。班では、さらなるGAPの取り組み水準の向上を目的とし、年に1回の自主検査（内部検査員による現地確認）を10月12日に実施した。

自主検査は、認証GAPであるGLOBALG.A.P.の確認項目に準じて実施され、衛生管理、労働者安全等の視点から現地の取り組み状況の確認と改善提案がなされた。

農業普及課では、現地確認で使用するチェックシートの作成支援及び効率的な現地確認の実施について支援を行った。



【現地確認をする内部検査員】

■ほうれんそう **中間検討会を開催【スマート農業加速化実証事業】**

9月25日、「夏ほうれんそう産地まるごとスマート農業加速化実証コンソーシアム」の中間検討会が開催された。当事業では①遮光カーテンの自動制御、②ラジコン草刈機、③自動追従型運搬機、④アシストスーツ、⑤出荷予測の精度向上、⑥通信基地局の整備によるデータ蓄積の仕組みづくりの6課題に取り組んでいる。

検討会はWeb会議で開催されたため、今年度農業普及課に導入されたタブレットを活用して参加した。

当日は各課題の進捗状況が報告され、導入が遅れている自動追従運搬機の開発状況や、アシストスーツと組み合わせた労力軽減の可能性など、今後の取り組みについて議論された。

農業普及課は、進行管理役として実証内容の調査・検討を進め、スマート農業技術のほうれんそう経営への導入可能性について検証していく。



【Web会議で議論】

■夏秋トマト **夏秋トマト3Sシステム研究会栽培研修会**

10月20日に夏秋トマト3Sシステム研究会栽培研修会が中山間農業研究所で開催された。3Sシステム（土壌から隔離したポット栽培）導入者及び興味のある生産者や関係機関に向けて、現地における3S栽培の生育調査結果について情報を提供した。

特に、慣行栽培と同じ誘引方法で3S栽培を行う斜め誘引タイプについて、今年初めて現地で実践している農家を視察し、利点及び注意点等について説明した。

今後は、3Sシステム研究会の反省会にて、今年の結果及び来年に向けた課題について意見交換する予定である。



【生育調査結果報告】

■あきしまささげ 品評会を開催～豪雨を乗り越え良品出揃う～

あきしまささげは丹生川町を中心に古くから栽培されており、「飛騨・美濃伝統野菜」に指定されている。

10月7日、品評会が開催され、出品された8点について農業普及課、丹生川蔬菜出荷組合役員会、JA職員が審査した。今年は生育期にあたる7月に豪雨に見舞われたため出荷が危ぶまれていたが、無事にこれを乗り越え、品評会にはきれいな縞模様をもった良品が出揃った。審査者の厳正な審査のもと、最優秀賞および優秀賞3点が選出され、入賞したあきしまささげは古田知事に贈呈された。



【審査は難航した】

住みよい農村づくり

■鳥獣害対策 サル大型囲い罠の設置

中山間地域の農業にとって、鳥獣被害対策は重要な課題となっており、岐阜県でもイノシシ、シカ、サルが野生鳥獣の農作物被害の上位を占めている。

被害対策として侵入防止柵や電気柵の導入が進み、イノシシやシカの被害は減少しつつあるが、サルは防止柵を乗り越えて侵入することができ、朝日町（宮之前、西洞）の野菜農家、上宝町（長倉）の果樹農家は甚大な被害を受け困窮している。また、近年では久々野町、一之宮町、清見町、荘川町などでも被害が広がっている。

農業普及課では現地巡回をし、サルの食害にあっている農家の情報や、サルの行動域などの情報を収集し、高山市農政部と協力して、サルの実害が大きい朝日町、上宝町、荘川町にそれぞれサルの大型囲い罠を設置し、サルの直接捕獲による、農業被害を防ぐ取り組みを支援している。

設置された大型囲い罠はサルを餌付けし捕獲するもので、地域住民の協力と継続的な運用が必要となる。今後も定期的な巡回を通して運用状況を確認し、高山市と連携し、必要に応じて効率的にサル捕獲ができる研修等を行っていく。



【地元農家も設置をお手伝い】